



TITLE:

京大広報 号外

AUTHOR(S):

京都大学広報センター

CITATION:

京都大学広報センター. 京大広報 号外. 京大広報 2007, 0704s: 2339-2348

ISSUE DATE:

2007-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196469>

RIGHT:



京大広報

号外

2007. 4

目次

〈卒業式・学位授与式〉

卒業式における総長のことば……………2340

修士学位・修士(専門職)学位・法務博士(専門職)

学位授与式における総長のことば……………2342

博士学位授与式における総長のことば……………2344

〈大学の動き〉

平成18年度卒業式……………2347

平成18年度修士学位・修士(専門職)学位・

法務博士(専門職)学位授与式……………2347

博士学位授与式……………2348

〈医療技術短期大学部の動き〉

平成18年度医療技術短期大学部

卒業式・修了式……………2348



平成18年度 卒業式

京都大学広報センター

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

卒業式・学位授与式

卒業式における総長のことば

平成19年 3月26日

総長 尾 池 和 夫

本日、卒業される、2,708名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。ご来賓の沢田敏男元総長、井村裕夫元総長、長尾 真前総長、名誉教授、ご列席の副学長、研究科長、学部長、教職員とともに、皆さんのご卒業を心からお祝い申し上げます。また、ご家族の皆様にも心からお慶び申し上げます。

京都大学を卒業した方たちは世界で活躍しておりますが、皆さんで卒業生は、京都大学の110年の歴史の中で、累計が176,806名になりました。

今年卒業生2,708名の中で、女子が561名います。もっと多くの女子学生に入学し、卒業してほしいと、私は思っています。『京都大学大学文書館だより』(2005年10月29日 Vol. 7)に「データで見る京都大学の歴史、京都大学の女性教員」という詳しい報告を、京都大学大学文書館助手保田そのさんが書いています。それによると、「教授については、1970(昭和45)年6月に柳島静江が教養部教授に昇格したのが第1号であり、女性助教授の誕生より16年遅れた。彼女は「京大初的女子学生」として1946年に京都帝大理学部に入学生のうち1人でもあり、卒業時に女性を対象とした求人がなかったから、奨学生となって大学院に進み、理学部助手、教養部助教授を経て教授に昇格した。なお女性教授が2名に増えるのはその5年後の1975年11月であり」と報告が続いています。

日本ではすでに人口が減少する傾向が見られ、2007年の出生率は過去最低を更新するという予測があります。日本では少子化対策が重要課題であります。少子化を招く原因の第1は、教育費の負担で、国立大学が法人化して最初に出会った難問が授業料の値上げでありました。財務省は第1期中期目標期間中は授業料の標準額を改訂しないという約束をしていますが、これはいずれ見直すという方針とも受け取れますから、国立大学にとって大きな問題であります。少子化にいちばん深く関係しているのが、授業料を含む教育費の家計からの負担です。先進諸国の中で、日本は目立って高等教育に国費の支出が少ない国で、国立私立を問わず教育の国費からの支援をもっともっと充実しなければなりません。

少子化の第2の原因は女性が働くことを支援する仕組みの遅れであります。京都大学では、2006年度ようやく「京都大学女性研究者支援センター」を設



立し、2007年2月5日には附属病院に病児保育室を開室しました。京都大学の女性教員は増加傾向にはあるとはいえ、2006年現在6.7%であり、まったく少ない状態が続いています。

スウェーデンのKarolinska InstituteのProfessor Harriet Wallberg-Henrikssonは、KI初の女性のPresidentです。彼女はKarolinska Instituteの女性教授の割合を40%に引き上げたいと言っていました。が、今でもすでに15%の女性教授がいます。

このような目標にはまだまだ遠いのですが、京都大学でもさらに女性教職員と学生に支援ができるような仕組みを整備していきたいと思っています。今日卒業される皆さんの中にはさらに京都大学大学院に進学される方もおられ、また京都大学で仕事をする方もおられると思いますが、このような女性支援の仕組みの整備にも知恵を出していただきたいと思います。

京都大学の基本理念の最初には「地球社会の調和ある共存に貢献するため、自由と調和を基礎に、ここに基本理念を定める」と書いてあります。地球のことを考えるときには、地球社会が発信するさまざまなメッセージを受けとめて、その意味を私たちは考える必要があります。今年は卒業式のときに京都の桜が咲き始めているのはどういう意味を持つかを考えたいと思います。昨日の能登半島西部の地震は、 2×10^{15} ジュールほどのエネルギーを地球が消費した現象ですが、それが来るべき南海地震に向けて西日本にさらに力が加わってきたことを意味しているのかどうか、そのようなことも考えてみたいと思います。

私は、皆さんにヒト属のことを考えるときには、他の生物のことも、また地球のことも、同じ土俵で考えることを薦めます。日本のヒト科で、もっとも

少子高齢化が進んでいるのはゴリラ属です。ヒト科の生物の中には、オランウータン、ゴリラ、チンパンジーとヒトの4属がありますが、これらの中でヒト属を除く3属が絶滅危惧種であります。ヒト属はまだ絶滅危惧種には入っていません。

京都大学霊長類研究所の松沢哲郎さんの書いた『おかあさんになったアイ、チンパンジーの親子と文化』（講談社学術文庫）によれば、ヒトとニホンザルには、だいたい3000万年前に共通の祖先がいました。エイブおよびヒトのグループと、モンキーのグループが分かれたのが、だいたい3000万年くらい前だといえます。オランウータンはだいたい1200万年くらい前にヒトと分かれ、ゴリラはだいたい800万年くらい前に、チンパンジーは500万年くらい前にヒトと分かれたというのですから、チンパンジーはニホンザルよりはるかにヒトに近いということになります。

西アフリカのギニアにあるボッソウ村で、京都大学の研究者たちは30年以上、野生のチンパンジーの群れの観察と研究を続けてきました。世界の霊長類学をリードしている研究成果ですが、このチンパンジーの群れの個体数が以前の約3分の2まで激減しています。この研究のリーダーである霊長類研究所長の松沢哲郎さんたちは、ギニアで森林を再生させる「緑の回廊」プロジェクトを進めています。ボッソウ村でのチンパンジーの野外観察は1976年に、霊長類研究所長だった杉山幸丸さんが開始し、それ以来続けてきた研究の成果として、チンパンジーが石で木の実を割ったり、親以外の大人が幼児を支援したり、ヒトに近い行動を観察した結果を記録してきました。

人類の起源の解明には霊長類研究が必須だ、という日本学術会議の勧告から3年後、1967年6月1日に、京都大学霊長類研究所が全国共同利用の附置研究所として発足しました。したがって、霊長類研究所は、今年6月1日に、創立40周年を迎えます。

霊長類研究に永い経験を持つ Jane Goodall さんが京都大学に来られたとき、私は簡単に、「チンパンジーを守るために、京都大学に何ができますか」と聞きました。彼女の答えも簡単で、「学問をやってください」というものでした。

木と森のことを少し考えてみたいと思いました。国民1人あたりの森林の面積を見ると、カナダは8.3ha、フィンランド3.9ha、ブラジル3.4ha、スウェーデン2.8ha、ザイール2.5ha、オーストラリア2.3haで、日本はたった0.2haです。しかし、国土の面積に対する森林の割合は大きく、カナダの26.5%に対

して、日本は66.8%もあります。日本は木と森の国で、原生林も多く、たとえば、屋久杉は千年を超えていて初めて屋久杉と呼ぶことができるといえます。千年未満は小杉というそうです。

今日卒業される皆さんにも、京都大学のさまざまな分野で学習された知恵を活かして、木と森のことを考えてほしいという願いがあって、今年から卒業の記念に祝箸を贈ることにしました。

この祝箸と京都大学の和歌山研究林の関係について、少し説明します。和歌山研究林は、和歌山県有田川支流湯川川の源流部に位置しています。和歌山県ではありますが標高が高いために冬には積雪がみられ、紀伊半島のほぼ中央で、奈良県との県境に近い場所にあります。人工林の教育研究の場として適地であるため、昭和の初期には樹木の疎な所へのスギ・ヒノキの樹下植栽が行われましたが、戦中戦後の混乱期には伐採、造林ともに縮小しました。1956(昭和31)年以降には大規模な皆伐が行われるようになり、その伐採跡地には主にスギとヒノキが植栽されました。

同じ時期に植えられた日本中の人工林と同様に、今や40-50歳となり、伐採を待つばかりの状態にあります。しかし、わが国では木材を伐採しても採算が合わない状態となってしまうています。そのため、人工林を所有する多くの林業経営者が伐採、施業を行えない状態が続いています。

人工林は自然にできた森とはちがって、同じ種類のやせた木だけが生えている生物多様性の低い、非常にいびつな森林になってしまいます。水源に位置することの多い森林の状態が悪化すると、下流のすべての生態系に影響が生じます。このような状況の中で京都大学は適性な間伐を行い、その間伐した木材を有効に利用しようとしています。j-Pod と呼ばれる耐震性の高い構造をもった木造建築もその一つです。本部構内に国際交流セミナーハウスが、この方式で建てられています。

この建物の木材の端切れを使って箸を作りました。その箸を皆さんの卒業を祝って贈りたいと思います。

今年の修士論文の中に、地球環境学舎環境マネジメント専攻の松倉 崇さんの論文があります。論文の題は「木材資源としての大学研究林の活用に関する考察—スギ間伐材を用いた学内木造施設の建築を通して—」というものです。その論文によると、国際交流セミナーハウス建設プロジェクトで、一次製

材が行なわれた松田製材所で、かなりの量のスギ丸太の端材が発生したそうです。

皆さんに贈る祝箸の加工は、吉野郡吉野町国栖にある吉野製箸工業協同組合の辰田製箸所で行われました。長さ50センチの角箸に「京都大学」の文字を入れ、3,300本制作されました。元の木は北向き斜面に立っていた1968(昭和43)年造林のスギ100本分です。

箸は、中国や韓国などでも用いられます。日本ではとくに多くの種類の箸が用いられています。割箸は日本独自の製品で、製材の過程での端切れを活用する方式で作られます。箸に使う木も、地下にある石炭も、炭酸ガスを固定しているものですが、それらをどのように使うのが地球環境を大切にするために最も効果的かを皆さんにも考えてほしいと思っています。

また、日本は万葉集の時代から、掛詞の文化を持っています。「はし」にはいろいろの漢字が対応しま

す。箸、嘴は食のシンボルです。京都大学を卒業して湯川秀樹博士は京都の料理を楽しみ、朝永振一郎博士は酒を愛し、野依良治博士はワインを飲むときには特上のワインを選べと教えます。端は先のとがったもの、世界の先端の仕事をして欲しいという願いであり、梯、階は上下のつながりを、橋、梁は水平の方向の架け橋を意味しています。いずれも皆さんの将来に期待されている役目です。

皆さんはこれからさまざまな道を進んで行かれると思います。明日から社会に出て仕事を始める方もいるでしょう。すでに仕事を始めている方もいます。また、大学院に進学して学問をさらに深める道を進む方もいるでしょう。いずれにしても健康を守ることが大切にして、地球社会の調和ある共存に貢献していただくよう、あらためてお願いして、学士学位を得られた皆さんへの私のお祝いの言葉といたします。

ご卒業おめでとうございます。

修士学位・修士（専門職）学位・ 法務博士（専門職）学位授与式に おける総長のことば

平成19年 3月23日

総長 尾 池 和 夫

本日、京都大学修士の学位を得られた2,146名の皆さん、社会健康医学修士(専門職)の学位を得られた20名の皆さん、法務博士(専門職)の学位を得られた189名の皆さん、まことにめでとうございます。ご来賓の長尾 真前総長、名誉教授、ご列席の副学長、研究科長、学舎長、教育部長、研究所長、教職員とともに、皆さんの学位を心からお祝い申し上げます。

本日で、京都大学が授与した修士の学位は累計54,801名、社会健康医学修士(専門職)の学位の累計は73名、法務博士(専門職)の学位の累計は323名になりました。また、本日のこの学位授与式では、499名の女性が含まれていますが、私はもっとも多くの女性にこの学位も得てほしいと願って、今後とも京都大学の女性支援の仕組みを整備していきたいと思っています。

法務博士(専門職)の学位は昨年が最初で、今年は2回目の授与であります。皆さんは、現代の複雑で高

度な法的問題に対処することができる高い能力を持った法律家となって学位を得られた方々であります。

社会健康医学修士(専門職)の学位は、2004年度が最初で今年は3回目であります。医学、薬学、生命科学、数理科学、情報科学、社会科学、人文科学を包括した学際的な教育と研究を行う専攻であり、皆さんの先輩はすでに、病院クリニカル・リサーチ・コーディネーターとして、専任医療安全管理職として活躍し、また、国際協力機関、大学院、中央官庁など幅広い分野で活躍しておられます。

皆さんの修士論文の課題を拝見していて、とくに環境を課題とする研究が増えてきたように感じました。

情報学研究科社会情報学専攻の奥村直子さんは、ジュゴンの声を研究し、鳴き声の音声パターンを解析しました。同じく、坂本志磨子さんは、自動的に鳴き声を録音する装置を用いてジュゴンの行動と船舶の騒音の関係を研究し、ジュゴンに対する人の影響を調べました。菱本陽一郎さんは飼育されているジュゴンの鳴き声と行動の関係を調べました。

いずれもバイオテレメトリーによる水圏生物資源情報の解析を研究課題としている荒井修亮先生のグループの方たちです。

この研究グループでは、人と絶滅危惧種の生物の共存を目標において、特に水圏の生態系と生物資源

を研究しています。生態系を破壊することなく、食料としての生物資源を持続的に利用していく可能性を求めて、この研究をしています。

その研究の方法としては、おもにバイオテレメトリーとバイオリギングと呼ぶ装置を使います。動物の個体に小型の発信器を取り付けて、水圏での行動と生息環境を測定し、さまざまな面から水圏生物の生態を調べるのです。

一般に今まで生物の行動を研究するためには、野外で目視観察を行ってその記録を資料として研究を進めてきました。特に京都大学では、例えば霊長類研究所のように、長い歴史を持つフィールドワークの伝統を築きあげてきました。

一方、直接見ることでできない海の生物に関しては、その実態はあまり知られていませんでした。よく科学の進歩が技術の進歩をもたせると言いますが、私はその逆に、技術の進歩が基礎科学を大きく前進させる力になることを忘れてはならないと思っています。例えば、このバイオテレメトリー方式での観察は、その典型であろうと思います。電子技術の発達によって記録計の超小型化を実現し、大型の海洋動物はもちろん、鳥類や魚類などさまざまな生物への利用を可能とし、さまざまなセンサーの小型化と高感度化が進んだおかげで、研究の領域が大きく広がったのです。

このバイオテレメトリーによる水圏生物資源情報の解析という研究テーマは、京都大学が他国に先駆けて開発し、多くの成果をあげており、未知の領域に挑戦する研究課題として若い研究者たちに大きな夢を与えている分野の一つだと、私は思っています。

京都大学は2006年度に初めて環境報告書を出版しました。この環境報告書は、学内外のさまざまな関係者(ステークホルダー)とのコミュニケーションツールですと、その報告書は説明しています。社会貢献とコミュニケーションを促進する試みとして、京都大学環境報告書ステークホルダー委員会を設置して、多くの貴重な提言をいただきました。

ステークホルダー委員会からは、本報告書や京都大学の環境取り組みについて提言をいただきました。それには、環境マネジメントシステムを構築し、PDCA(Plan Do Check Action)サイクルおよび運営体制を明確にすることや、リスク、安全管理や法的要求事項の遵守については、常に確認を行い、確実にすることや、構成員への本報告書の周知に努め、「できることから始める」ことを呼びかけていくこと



というような重要な指摘がたくさんあります。

また、それに答えて、京都大学環境憲章を具体化するため、京都大学にふさわしい環境安全衛生マネジメントシステムの確立が急務であると考えていますという、大寫幸一郎環境安全保健機構長のコメントなどが掲載されています。

この報告書は、環境省の第10回環境コミュニケーション大賞の環境報告書部門において、3月26日の表彰式で優秀賞を受賞することになっています。

ステークホルダー委員会に参加して下さった方の中にも今日修士の学位を得られた方がいます。

遠藤 峻(地球環境学舎環境マネジメント専攻)さんの修士論文の題目は「使用済み電気電子機器の越境移動政策に関する一考察」です。電気電子機器の消費と廃棄が世界で急速に拡大する中で、中古製品、再生資源としての国境を越えた移動が起こっています。それにともない、開発途上国での環境汚染の顕在化も指摘されています。この修士論文では、使用済みパソコンに関して、日本から海外への移動の形態を調査しながら、各国での責任を分担するための方策を論じています。

福井和樹(工学研究科都市環境工学専攻)さんの修士論文の題目は「蛍光管に含有される水銀のライフサイクル挙動と循環システムに関する研究」というものです。水銀を含む蛍光管を取り上げて、日本における水銀の物質フロー解析により、有害物質を含む家庭製品の循環システム構築の方向性を検討したものです。製品由来の水銀は年間10~20トン流通しており、そのうち5トンが蛍光管由来であること、回収される水銀は0.6トンのみで、大半が廃棄物として処理、処分されていて、リサイクル量は小さいということなどが分かりました。規制策や新たな技術およびビジネスモデルの創出を検討する必要があると考えられます。

木材は典型的な環境材です。木材は、生産の過程で炭素を吸収固定し、生活環境を快適にし、他の材料にくらべて加工エネルギーが圧倒的に少なく、廃棄しても生態系に戻るといった優れた特性を持っています。現在、木材は8割が輸入され、一方で国内の造林地の多くが放置されています。

地球環境学舎環境マネジメント専攻の松倉 崇さんの修士論文は「木材資源としての大学研究林の活用に関する考察—スギ間伐材を用いた学内木造施設の建築を通して—」という題です。それには和歌山の研究林でのプロジェクトが詳しく記載され分析されています。

京都大学の和歌山研究林の間伐材で京都大学構内にセミナーハウスを建設しましたが、そのプロジェクトの端材は、割り箸に加工されました。木材を製材すると、相当量の端材が発生しますが、端材は、木の加工品、紙製品、バイオマス等への利用が行われています。国産割り箸生産の中心地である吉野の製法では、すべて端材で、大量の森林が伐採されることはありません。セミナーハウス建設プロジェクトにおいて、一次製材が行われた松田製材所では、相当量のスギ丸太の端材が発生しました。

3月26日の卒業式には、祝箸を卒業生に贈ることにしましたが、長さ50cm、天12mm、先6mmの角箸に「京都大学」の4文字の焼印の入ったものとなりました。学部卒業生用に3,300本が制作されましたが、選木された立木は、軽トラックが走行可能な作業道沿いで、北向き斜面に立つ、1968(昭和43)年造林の39年生スギ100本でありました。

本日、京都大学修士、社会健康医学修士(専門職)、法務博士(専門職)の学位を得られた皆さんは、明日からさらに進学して学問を深める方も、社会に出て仕事に従事される方も、その他の道を進んでいく方もおられることでしょう。どのような道に進まれるにしても、京都大学が基本理念に掲げる、地球社会の調和ある共存に貢献することに、いつも思いをいたしてほしいと思います。また、京都大学の同窓生としても、この総合大学の知の蓄積を活用しつつ活躍し、後輩の育成にも力を貸していただきたいと思っています。

皆さんが健康で今後とも力強く活躍されることを祈って、私の学位授与式の式辞といたします。

本日は、まことにおめでとうございます。

博士学位授与式における 総長のことば

平成19年3月23日

総長 尾 池 和 夫

本日、博士学位を受けられた課程博士540名、論文博士92名、合計632名の皆さん、まことにありがとうございます。ご列席の理事、研究科長、学舎長とともに、心からお祝い申し上げます。

磨かれた才能を活かして、長い年月の時間と、あらん限りの努力を注ぎ込んで、研究成果を論文にまとめ、何度も推敲を重ね、提出した論文が厳しい審査にみごとに合格して、本日実際に学位記を手にした感慨は、その一連の過程を経験した人へののみ実感される特別のものであります。

前世紀までの期間は、エネルギーと資源を消費して人類が発展を求めた期間と言われます。その急激な発展が地球社会に大きなストレスを与えています。人類はそれに対してしっかりと対処していかな



ければ、地球社会はその生命を維持できなくなることでしょう。京都大学はその重要性を認識して、基本理念に、地球社会の調和ある共存に貢献するため、自由と調和を基礎に、ここに基本理念を定めるとし

てあります。

1984年に国連に設置された「環境と開発に関する世界委員会」(WCED=World Commission on Environment and Development)は、ノルウェーのブルントラントさんが委員長だったことから、ブルントラント委員会と呼ばれています。1982年に開催された国連環境計画(UNEP)管理理事会特別会議(ナイロビ会議)で、日本が特別委員会の設置を提案して国連総会で承認されたものです。約4年間でまとめられた報告書が「Our Common Future(『地球の未来を守るために』)」です。将来の世代のニーズを損なうことなく、現在の世代のニーズを満たすという、持続可能な開発の概念が打ち出され、その後の地球環境保全のための取組みの重要な道しるべとなりました。

持続可能な開発の概念は理解できても、実現のためには多くの解決すべき課題を人類は持っています。それらの一つひとつを研究テーマとしつつ、常に研究成果を総合して、実行可能な体制を作っていくことが必要です。日本の現状を見たとき、必ずしも前向きに進んでいるとは思えないことが多々あります。

たとえば、イェール大学のポール・ケネディーは、北欧3国、北西ヨーロッパ5か国で環境マインドが高い理由として、十分豊であることと、教育水準が十分高いということをあげました。これらの国では1人あたりGDPは2万5千ドルから3万ドル、大学進学率は30%台後半です。これに比べて、日本のGDPが4万ドル、大学進学率は50%を超えていますが、環境に関する意識は決してそんなに高くはないと思います。というよりも知的水準が高いと思えない面があります。それは第3期科学技術基本計画の策定にあたって行われた国民の調査の結果にも見られます。

皆さんは学位を取得したのち、大学を出てさまざまな進路に進まれるか、あるいは今までの仕事をさらに深められると思いますが、北欧などの環境先進国を訪問して実際にその市民に出会ってみることをお勧めします。たとえば、道路を横切ろうとすると、すぐびたっと止まって待つ車に挨拶し、無駄のないように工夫した木の家具や道具に触れ、祭りの中でソーセージを載せた皿まで食べてみて、その意識の高さを実感することができるでしょう。

京都大学は、本当に市民の知的レベルを上げるような教育と研究を目指したいと思います。市民全体

の教育水準を高めて、メディアに流れるさまざまな情報の洪水の中から、安易に作られた、あるいは偽の情報に惑わされることなく、本物の情報を見分ける能力を備えた市民を育てていくことを目指したいと思います。また、京都大学はメディアに載せるべき価値のある情報を生産する役割を果たさなければなりません。

今回、学位を授与した論文の中から、環境のことに関係するものをいくつか紹介したいと思います。

大学院地球環境学堂は、ベトナム国ハノイ市のベトナム科学技術アカデミー(Vietnam Academy of Science and Technology, VAST)の環境技術研究所(Institute of Environmental Technology, IET)の中に、独自の教育研究拠点を開設しました。

2005年12月6日には、ベトナムの、Tran Van Minh フエ農林大学長が、京都大学を訪問されました。この大学は地球環境学堂と学術交流協定を締結していて、大学院生のインターンシップをはじめとする教育と研究の協力を行っています。

河井紘輔さんの、博士(地球環境学)の学位論文題目は、「ベトナム・ハノイにおける都市廃棄物循環の促進に関する提案」です。主査は、松井三郎教授です。

この論文は、ベトナム・ハノイにおける都市廃棄物と有価物に関する調査研究と、それを踏まえた都市廃棄物循環の促進に関する提案をまとめたものです。急速な勢いで経済発展を遂げる東南アジア諸国は、経済活動を優先するあまり、環境への配慮が後回しにされ、すでにさまざまな環境問題が発生しています。とりわけ都市廃棄物問題は、深刻な状況です。河井さんは、ハノイにインターン研修で1年3ヶ月滞在し、共同調査と実験研究を行って、その成果を論文にまとめました。

原田英典さんの博士(地球環境学)の学位論文題目は、「先進的サニテーションシステムの提案およびベトナム衛生改善への試み」です。主査は、同じく松井三郎教授です。

途上国での尿尿処理の問題は、国際社会にとっての緊急課題です。有価物を豊富に含む尿尿の適切な農業利用が、この衛生問題の改善に大きく寄与する可能性をもっています。原田さんも、インターン研修でベトナムに滞在し、共同調査と実験研究を行いました。また日本における実験研究に基づいた尿尿の資源循環の機能を備えた新しい衛生システムを提案し、ベトナムの衛生改善に結びつく結果を得ました。

日本にとって重要な課題の中に、水の大量輸入の

問題があります。日本は、食糧生産に必要な水や、木材の生産に使われる水を間接的に輸入している国です。生産物 1 kg をつくるのに要する水は、たとえば米で 5,100 リットル、牛で 100,000 リットルと言われます。また、樹木が根から吸収する水のうち 95% は葉から蒸発すると言われます。とくに雨の少ない地域からの木材輸入は水を収奪していることとなります。したがって食料も木材も国産による方がいいと思われれます。水の問題はこのような間接水のことから、洪水の対策にいたるまで幅広く存在し、21 世紀の人類の大きな課題の一つです。

増富祐司さんの博士(地球環境学)の学位論文題目は、「世界流域データベースの開発とその応用」です。主査は、松岡 譲教授です。

水の問題の解決には、自然科学から社会科学まで幅広い要因を考慮して、流域から地球規模にわたる統合的な研究や解析と、それに基づく対策や管理を行うことが必要となるという視点で、この論文は書かれています。流域を詳細に表現する単位流域をベースとして、自然科学的な情報から社会科学的情報まで幅広く含む世界流域データベースを開発して、その応用に関する研究をまとめられました。

佐野静代さんの博士(文学)の学位論文題目は、「水辺環境と村落景観の歴史地理学的研究」です。主査は、金田章裕教授です。

本研究は、「生業が景観を作り出す」という視点で、数百年に及ぶ水辺の景観の変化にあらわれた、人と水辺との関わりの変化を、歴史地理学的に解明する試みであります。事例として採りあげられているのは、主として琵琶湖をとりまく平野と湖岸であり、とりわけ、河川と湖岸、内湖に関心が向けられています。水のことを考えるもう一つの視点として、私はたいへん興味を持ちました。

2006 年 7 月 13 日には、第 1 回の「ロレアル・ユネスコ女性科学者日本奨励賞」を京都大学大学院理学研究科博士課程(生物科学専攻)3 回生の野中美応さんが受賞されました。この賞は、パリに本社を置くロレアルグループと国連専門機関のユネスコが、生命科学および物質科学の分野で、研究意欲に溢れる若手女性科学者の研究を助成し、日本の将来の科学の発展に寄与していきたいと願って、2005 年 11 月に設立したものです。

野中さんの学位論文題目は、「PSD-95 の PDZ ドメインのリガンド結合が、後シナプスにおける高密度分子集積と樹状突起のスパイン(棘突起)形態を制御する」

です。主査は、藤吉好則教授です。この論文は、神経細胞を形成するシナプスに存在する足場タンパク質が高密度に集積する仕組みを解明したものです。

21 世紀の課題の中で、日本では少子化の問題があります。人工が減少し始めています。人材を確保するためには、まず男女共同参画社会を確立することが大切です。京都大学でも少しずつですが、そのための整備を進め、本年度には女性研究者の支援センターや病児保育施設の整備を行いました。

日本で少子高齢化のもっとも進行しているヒト科の生物はゴリラ属です。チンパンジー属もオランウータン属も含めて、ヒト科 3 属が絶滅危惧種になっています。

林 美里さんの博士(理学)の学位論文題目は、「物の操作からみたチンパンジーの認知発達」です。主査は、松沢哲郎教授です。

この論文は、チンパンジーの認知発達の研究に関するものです。認知発達の指標として、物の操作に着目しました。ヒトを含めた霊長類の特徴として、物を片手でつかんで口に入れる、というように、手で物を操作する能力があります。これはヒトを含めた一部の霊長類で顕著な道具使用の先駆けとなる行動だと理解されています。ヒトと最も近縁のチンパンジーを対象とした研究によって観察可能な認知機能とその発達過程を明らかにした論文です。

2006 年度の総長賞を差上げた方たちの論文も紹介したいと思います。

米田英嗣さんの博士(教育学)の学位論文題目は、「物語理解における感情の処理過程」です。主査は、楠見 孝助教授です。

物語理解における主人公の感情、読者の感情、主人公と読者の性格特性の相互作用から生じる感情といった感情情報の処理過程を実験的に解明しました。工夫されたパラダイムを用いた実験から「読者-主人公相互作用モデル」を提案し、物語理解における主人公と読者の感情過程を統合的に検討した論文です。

北原鉄朗さんの博士(情報学)の学位論文題目は、「計算機による楽器音認識および内容に基づく音楽情報検索への応用」です。主査は、奥乃 博教授です。

計算機によって、楽器の音の特徴を基本周波数の関数としてモデル化したり、複数の楽器の演奏での音の存在確率の変化を可視化するなどの方法によって、音楽情報検索に応用する研究をまとめ、実際に複数の楽器で演奏される音楽の分析を行いました。

最後に、私の所属していた分野である理学研究科地球惑星科学専攻の学位論文から、白玲さんの学位論文題目は、「2004年紀伊半島南東沖地震：震源再決定、震源過程、そのテクトニックな意味」です。主査は川崎一朗教授です。早ければあと20年ほどで起こるであろう南海トラフの巨大地震想定震源領域の南側について、新しい知見を加えたものとして評価されました。

皆さんの学位論文と、それを完成するまでに仲間と交わした議論や、実験のデータ、開発された研究手段、報告されたさまざまな成果は、すべて人類の知的財産として蓄積され、今後長く活用されること

になります。また、同時に皆さんは自ら発したそのような知財を今後ともさらに検討を加え、あるいは改訂し、改良していく責任を持つと同時に、研究の成果を世界の人々に伝達する仕事をこなすことが求められるでしょう。学位を授与されるということは、研究者としての責任をしっかりと自覚するという意味をも持っているのです。

今後とも健康に留意しながら、ますますご活躍されることを祈って、私の博士学位授与式の式辞いたします。

おめでとうございます。

大学の動き

平成18年度卒業式

3月26日(月)午前10時から、総合体育館において沢田敏男元総長、井村裕夫元総長、長尾 真前総長、名誉教授をはじめ各副学長、各部局長等の出席のもとに平成18年度卒業式が挙行された。学歌斉唱の後、尾池和夫総長より各学部代表に学位記が授与された。

続いて総長の式辞があり、最後に全員で「蛍の光」を合唱して、午前10時45分に終了した。

新学士は、総合人間学部140人、文学部187人、教育学部78人、法学部378人、経済学部252人、理学部283人、医学部105人、薬学部93人、工学部900人、農学部292人の計2,708人であった。



平成18年度修士学位・修士(専門職)学位・法務博士(専門職)学位授与式

3月23日(金)午前10時から、総合体育館において長尾 真前総長、名誉教授をはじめ各副学長、各部局長等の出席のもとに平成18年度修士学位・修士(専門職)学位・法務博士(専門職)学位授与式が挙行された。尾池和夫総長より各研究科、学舎代表に学位記が授与された後、続いて総長の式辞があり、午前10時40分に終了した。

修士課程修了者は、文学112人、教育学39人、法学46人、経済学75人、理学295人、医科学12人、薬学76人、工学669人、農学268人、人間・環境学149人、エネルギー科学120人、地域研究11人、情報学180人、生命科学71人、地球環境学23人の計2,146人で、専



門職学位課程修了者は、社会健康医学20人、法務博士189人であった。

博士学位授与式

3月23日(金)午後1時から、総合体育館において、尾池和夫総長、東山紘久理事・副学長(教育・学生担当)をはじめ、各研究科長・学舎長出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記(3月23日付)が手渡された後、総長の式辞があり、午後2時40分に終了した。

各分野別内訳は次のとおりである。



学 位	課程博士	論文博士	計	学 位	課程博士	論文博士	計
博士(文学)	25	6	31	博士(工学)	99	27	126
博士(教育学)	4	6	10	博士(農学)	52	16	68
博士(法学)	2	2	4	博士(人間・環境学)	30	2	32
博士(経済学)	29	2	31	博士(エネルギー科学)	15	4	19
博士(理学)	90	11	101	博士(地域研究)	9	1	10
博士(医学)	85	9	94	博士(情報学)	32	3	35
博士(社会健康医学)	1	—	1	博士(生命科学)	24	1	25
博士(薬学)	28	1	29	博士(地球環境学)	15	1	16
				計	540	92	632

医療技術短期大学の動き

平成18年度医療技術短期大学部卒業式・修了式

医療技術短期大学部では、3月19日(月)午前10時から、会議室において、来賓の出席のもとに卒業式・修了式が挙行された。

式は、卒業証書・学位記および修了証書授与に引き続き、部長式辞、来賓祝辞があり、午前10時40分に終了した。

卒業生は、理学療法学科1人、作業療法学科1人で、修了生は、専攻科助産学特別専攻19人の計21人であった。

本短期大学部は、平成15年10月、4年制の医学部保健学科に移行し、平成16年度からは学生の募集を停止した。昭和50年4月の開設以来、卒業生3,997人、修了生617人を輩出し、この平成19年3月をもって廃止となった。

